

音楽のある街角

佐藤陽子



音楽のある街角 佐藤陽子 講談社



10021630

佐藤陽子（さとう・ようこ）

1950年福島県に生まれる。9歳の時、巨匠レオニード・コーガンに認められソ連に渡り、12年間本格的な音楽修業を続ける。モスクワ音楽院弦楽科を首席で卒業。66年、チャイコフスキー・コンクールで3位、69年、ロン・ティボー・コンクールで入賞など国際的に高い評価を受け、女流ヴァイオリニストとして第一人者の地位を築く。近年は、マスコミ界でも広い活躍をみせている。

著書「昼の眠りと夜の目醒め」（講談社）「17の変奏曲」（読売新聞社）

音楽のある街角

昭和五十五年七月二十五日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 佐藤陽子

発行者 野間省一

発行者 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二

郵便番号 一一二

電話 〇三―九四五―一一二（大代表）

振替口座 東京八―三九三〇

編集 株式会社第一出版センター

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

落丁本・乱丁本はおとりかえします



目次

ヴァイオリンと私——11

初めてヴァイオリンを手にした日 12
人前での演奏 22

レオニード・コーガン先生に見出されて 27

小学生のソ連留学 32

小さな外国人 38

ガガーリンおじさんと会って 49

モスクワでの初舞台 55

私の好きなピアノリスト、ラフマニノフのこと 63

ポリシヨイ・ホールでのデビュー・コンサート 68

三年振りの帰国 77

別荘地ルーザでの三週間 84

チャイコフスキー・コンクール 89

モスクワ音楽院の思い出 107

劇的な卒業演奏 118

黝き青春の日々 133

オフチンニコフとの出逢い 134

モスクワの秋から冬 142

結婚の悩みと押しかけ恋人 151

ロシアの土の香り 158

私の出逢った人々 165

レオニード・コーガン先生の厳しさと優しさ
オペラの生んだ名花、マリア・カラス先生 176

166

詩的哲人、ヨゼフ・シゲティ先生 191

キーロフ界限の人々 197

寄宿舎の老婦人 202

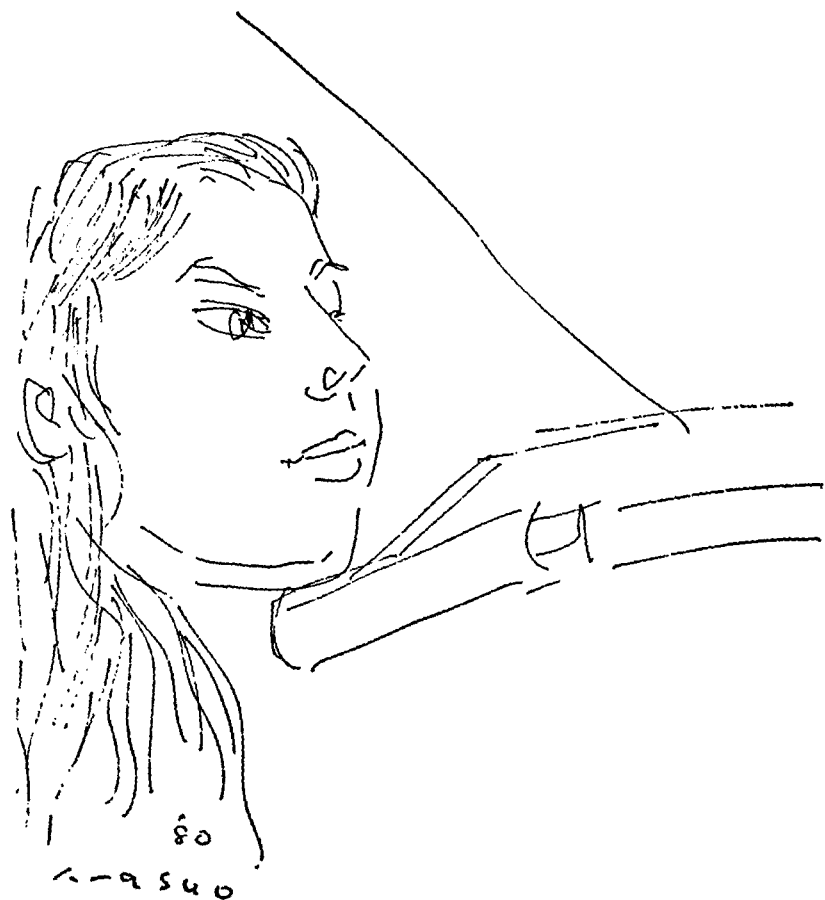
ネジュダーノワ通りの芸術家達 208

ゴリキー通りの女友達 218

人生の三分の一 224

あとがきにかえて 229

ヴァイオリンと私



初めてヴァイオリンを手にした日

やりさえすれば何でもできると信じさせられ、信じてしまった子供ほど怖いものはない。いとも簡単に自分は特別なことができて当り前だと思っている。

「人以上の努力すれば、人並以上になるはずですよ」

口のすっぱくなるほど言いかさされて私は育ったので、深く自分の可能性を信じ込み、何も怖いものはなかった。そして、そのかぎりない可能性の魔法の杖は、ほかでもないヴァイオリンだった。

私にとってヴァイオリンという楽器との出会いは、ちょうど人との出会いのようなものだ。これまでいろいろな人と会ってきたように、いろいろな楽器と会ってきた。そして多くの思い出ができた。

生まれてから二番目にできた記憶も、やはりヴァイオリンだった。最初の記憶が何だったか

というと、遊び場から家に帰る途中の道で、父親か母親かの背中越しに見た暗くなり始めていく赤い夕日である。私の二歳の時だった。

ヴァイオリンを初めて手にしたのは、三歳になった時だった。幼い私は、小さな変な音の出るその物体にはほとんど興味を覚えなかったし、ましてやヴァイオリンという存在に感動することなど全くなかった。今から考えると、時代のせいもあって私の家には、何一つとして音の出るものがなく、そもそも音というものに関して私の感覚は全く開発されていなかった。随分経ってから、電蓄とかピアノとかが入ってきて、ようやく音楽といえるものに接したわけだが、始めのうちはラジオさえあったかどうか憶えていない。そんなところに、自分でさぐりながら音を作らなければならないヴァイオリンなど与えられても、目を輝かせて何とか弾けるようにしようという気持にはならない。

三歳の私にヴァイオリンが鮮烈な記憶となって焼き付けられているのは、母が私の手を持つてヴァイオリンを持つ恰好をさせ、記念写真をとリ、そしてその日を境に私の毎日がすっかり変ってしまったからにほかならない。この写真が存在するおかげで、私は幼かったにもかかわらず、あの目を良く憶えている。初めてヴァイオリンという楽器を手にした日のことを。何かこそそ両親が話し合っている風なのを私は感じて、しばらくするうちに、ヴァイオリンという名前の十六分の一の楽器が現われた次の朝、



初めて楽器を手にした著者（三歳）

「記念写真を撮りに行きましょう」

と母は私の手を引っぱって、父の勤める雑誌社へ行き、ヴァイオリンの持ち方もろくに知らないまま、カメラの前に立たされた。

もちろん撮影室に入ったことも初めてだったし、何もかも珍しかったので、こと細かに憶えている。どんな主旨があつて記念撮影を親が考えたのか私は知らない。恐らくは単に一生の仕事になるかもしれない勉強に入る記録の一つ、というか区切りとして残そうと思つたのだろう。その日から私の全く違う生活が始まつた。ヴァイオリンを弾くことは、毎日食事をしたり、起床したりするのと同じだと感じるようになってしまつた。

母がなぜ私にヴァイオリンを始めさせたかという点、どんな偶然の災難に逢おうとも人に頼らずに生きていけるよう、そのためには幼少の時から習つた芸が、いかなる財産よりも役に立つはずだと考えていたからである。人の能力は、自分自身で破棄し、潰してしまわないかぎり、何もかも奪うことはできないのだ。しかし何故クラシックなのか。それは母が、娘時代からクラシック音楽に惹かれて異常なまでに打ち込んだものの、時すでに遅いと思うようにならなかつたからであろう。要するに自分の夢を子供に託そうとしたのだ。しかし、どのように始めるかはまるで決まっていなかった。

そうしたある日、雑誌の編集者だった私の父は、松本へ鈴木鎮一先生の、子供のための才能

教育^々を取材しにいった。帰ってきて父は、たくさんの子供達がいかに楽しそうにのびのびと演奏していたか、まるで遊びながら自然にヴァイオリンから音が出てくること、そして鈴木先生の人柄の魅力などについて、興奮して語った。さっそく私の前には小さなヴァイオリンが現われ、近所の西荻窪の教会で毎週一回おさらいを開いている、やさしい信心深いクリスチャンの女の先生のところへ通うようになる。山下先生というそのヴァイオリンの先生は、すでに全国的に広まっていた鈴木メソードの流れをくむ先生の一人だった。

鈴木先生は、何もたくさんの方のプロフェッショナル・ヴェルトウージ達を世に生み出そうというのではなく、一人でも多くの子供達に、生命の豊かさと美に対する理解を与え、日本人が日本語を話すように、フランス人の子供達がフランス語を話すようにヴァイオリンを通じて音楽と親しみ、そこからより自然な精神力と叡知のある人間に育って欲しいと考えておられた。當時は月に一回か二回、明徳幼稚園に東京の諸先生方をはじめ生徒とその父兄が集まり、鈴木先生がヴァイオリンを弾きながら楽しい講演をされていた。前後には子供達のユニゾン合奏があった。恐らく先生はこうした催しを各地でなされていたのだと思う。集会はいつも和やかでおそらく、良寛さまのようなところがありだった鈴木先生は、常に子供達の人気の的で、ずっとつけていながら知恵袋のような感じを受けたものだ。いつもお傍にいられる松本の人達が私には羨ましかった。

自國語を話すのと同じように、自由自在に楽器と馴染もうというのだから、当然通う年代は小学生以前が多い。そして私は、母が始めから決心していたおかげで最も早い三歳だった。本当は母にとって洋楽でさえあれば、ピアノでもよかったらしい。しかし、当時のわが家の経済状態ではピアノは無理だったので、ヴァイオリンになったともきいている。今でこそチェロ、ピアノ、フルートの部門ができたものの、なぜ鈴木先生は、子供への教育法はヴァイオリンが一番適しているとお考えになったのだろうか。フリッツ・クライスラーがいるから、ジョルジュ・エネスコがいるから、チェロだけだバプロ・カザルスがいるから、弓でもって心の絃を震動させる楽器の方がいいと思われたのか。日本人により向いているからか。私は直接聞いたはずなのに、ご返答の方はなぜか記憶にない。しかし今日のように、日本のヴァイオリン奏者がここまで世界的に高い評価を得るようになったのは、多々にして鈴木先生の、才能教育があつたおかげだといつていい。

大体、教祖的な存在になると、根本にあつた思想から離れていってしまうケースが多いが、鈴木先生にかぎっては、初めの頃と少しも変らぬ、ファミリアな真心のこもつた指導を片時もおろそかにされることがない。どうしてあの何万という子供達の面倒を見きれのか、ただただ驚嘆するばかりである。二十数年前でも一人人ははるかに越えていたのに、生徒達は時々お膝もとの松本まで合宿にいつては可愛がってもらつたのを思い出す。そんな時親はついてい

ってもいかなくてもよかったが、私は過保護でヴァイオリン以外何一つ独りではできず、したがってどこへでも母がついてくるのできまり悪かった。他の子供達は皆しっかりしていてめつたに親はついてこない。おけいこ事していると生活面でもきちっとしてくるのか、と妙に感心したものだ。

才能教育では初等科から高等科、専門科とわかれており、一つの課程を卒業するたびにお免状がいただけた。一段階卒業するにもかなり時間がかかる。

私は、ヴァイオリンを好きで好きでたまらないなどと思ったことはなかった代わりに、いくら練習に明け暮れようと、決していやで逃げ出したいと思つたこともなかった。人前で弾くのは最初から好きだった。何となく自分はプロのヴァイオリニストになるだろうと予感していたし、それに対して何の抵抗もなかった。今思うと、母にうまく乗せられていた気がしないでもない。しかし、音楽家の道を選んだことを後悔したことは一度もない。もちろん、音楽家にならなかつたにしろ私は何か生きがいを見つけただろうし、生きている実感のもてるものなら音楽に限らず何でもいいと考えている。が、とにかく大して辛いとも思わず、現在まで続いていたのだから音楽は私に向いていたのだろう。

ヴァイオリンから何とか音を出せるようになるまでに一年間はかかった。しかしそうなつても相変らずヴァイオリンを格別好きにならなかつた。

その頃私が何よりも好きなのは、本だった。絵の入った童話や伝記を飽かず眺めていた。ベートーヴェンやバッハの存在も音楽でなく、本を通して知った。始めのうちは、そんなふうだから、ヴァイオリンに対する愛着というものもあまりなかったが、ヴァイオリンを弾くことが私の生活そのものになってしまったので、私にとって音楽の意味が違ってきた。物事を考える時は、いつもヴァイオリンを弾いていたわけであり、次第にヴァイオリンが私の生きていく上の表現そのものになっていった。

もっとも小さな子供は誰でも、自分に可能性が無限に開かれていることを疑わない。私は、ヴァイオリンを通じて自分の憧れをすべて実現できると信じていた。憧れとは、おとぎの国ではいつもそうであるように、自分が一つの世界の王様になることであつた。いくら勉強は辛いといつても私にとって最も幸せな時期だつた気がする。

私は初等科を五歳の時に終える運びになった。母はこの頃、またもや私の将来について悩み出し、何度か松本の鈴木先生のところまで相談に出かけた。一緒についていった私は、よくわからないまま何日間も先生のお宅に泊つて、すっかりはしゃいでいた。大きな犬が何匹もいて、こわそうな面構えに思ったが、飼主に似て人なつこかつたのを憶えている。それに、テーパーコーダーという機械の魔力や、先生の和やかな雰囲気包まれて過ごすのはこの上ない幸

せだった。結局、鈴木先生の住まわれる松本へ一家中が移り住むわけにもいかず、母は夜も眠れないほど考え込んでいた。さていよいよ私の初等科卒業の日、昭和二十九年だったと思う、白いレースのついた大きな襟に黒いビロードのワンピース、エナメルの黒い靴に大きなリボンという出で立ちで、私は日本武道館に両親と出かけた。他に何千人もの子供達がヴァイオリンを抱えてつめかけていた。この日は、才能教育研究会にとっても実は記念すべき日だったのだ。というのは、これからあと毎年日本武道館で、このように盛大な式が催されているからである。去年はちょうど二十五周年記念があり、私も第一期卒業生としてお招きにあずかり、当時のなつかしいフィルムなどを見て、想いを新たにしたばかりである。あの日はもう一つ私にとって記念すべき日であった。私の弾いている時の顔写真が、ある大きなグラビア雑誌の表紙になったのである。生まれて初めて私は、家に五百円（だったと思う）という大金を入れることができたのだった。

しかしその日を最後に、私は近所の山下先生のところへも才能教育研究会へも行かなくなった。私は鷺見^{すゑみ}三郎先生の門下でレッスンをつむようになる。やがて私の一生を変えてしまったレオニード・コーガン先生とめぐり会う。ところで全く別のことだが、コーガン先生は松本で鈴木先生と出会い、生涯忘れ難い思い出が生まれている。風邪気味だったコーガン先生は、うっかり与えられた菓を飲んだところ、両手にひどいアレルギー症状を起こし、公演を中止せざ

るを得ないような悲惨な状態に追い込まれてしまった。その絶望のコーガン先生を救ったのが実は鈴木先生だった。東洋医学というのか、指圧のような鈴木先生の治療で奇蹟的にコーガン先生は回復し、無事コンサートの幕は上がった。鈴木先生はヴァイオリンの幼児教育以外にこうした力もお持ちだったのだ。聞くところによると、どちらの道に進もうかと先生自身、迷われたそう。そして、子供達を育てることの方が、より多くの人達のためになると判断されたのだろう。いずれにしても、鈴木先生の手によって育てられ、救われた人の数は測り知れない。二十年たった今でも、コーガン先生はなつかしそうに当時のことを話す。その話を聞きながら、私はよくよく鈴木先生と自分とのご縁の深さを感じるのである。